

# 集団で協力する学習場面における相互の関わり合いに関する研究

## 音楽学習を例として

左古 雄一郎（上越教育大学学部）

### 要 約

本研究では、音楽科における子どもたちの集団活動に注目する。そこから、子どもたちの学びの実態や、教師の働きかけが子どもたちの学びに与える影響を明らかにすることを目的とした。

その結果、教師が「指示」を控え、子どもたち自身に学習方法の選択を任せるようにすれば、子どもたちは自ら進んで学んでいけることが明らかになった。

[キーワード] 自発性 教師 課題解決 学習方法 選択

### 研究の背景と目的

音楽科授業において、教師の指導に注目した研究が多く行われている。篠原（1995）は、音楽実技を中心とした授業では、1授業時の約4割近く、教師が発言していることを示し、教師の分かりやすく、適切な「指示」が必要であると指摘している。<sup>1)</sup> また、森田（1993）は、子どもたち同士の関係は、教師の態度や行動によって、望ましい方向へと成長すると述べており<sup>2)</sup>、教師の指導が与える子ども同士の学びへの影響に注目する必要性を指摘している。

一方、山本（1973）は子ども相互の指導の強力は教師一人一人とは比較にならないことを指摘しており<sup>3)</sup>、集団活動における子ども同士の関わりに注目していくことを提案している。子ども同士が関わり合って、学習を深めていくことに関して、水落（2002）は、子ども同士の相互作用に注目し、学び合いの中で自己の学びを発展させていることを明らかにしている<sup>4)</sup>。これらは、子どもたちが集団活動の場を活用し、自ら学習を進めていくことができる存在であることを示している。

しかし、教師の指導と子どもの姿の関係性には触れておらず、指導によって子どもたちにどのような影響があるのかについて、臨床的な分析は行われていない。したがって、本研究では、教師の指導と子どもの姿に焦点を当て、教師の指導によって、子どもたちの学びにどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とする。

### 調査1

#### 1. 方法

対象：新潟県内公立小学校4年生

時期：2002年12月9日、10日

内容：グループ発表に向けて、リコーダーの練習をする。

分析：カセットテープレコーダーによる会話記録と、VTRによる映像記録、子どもたちの作文内容から分析した。

#### 2. 観察授業の特徴

グループ学習時、教師は常に教室に在るが、グループに介入することは少ない。子どもたちだけで学習する時間が多く、できないところがあれば、いつでも教師に聞ける状態である。

#### 3. 結果と考察

##### (1) 子どもたちの課題発見

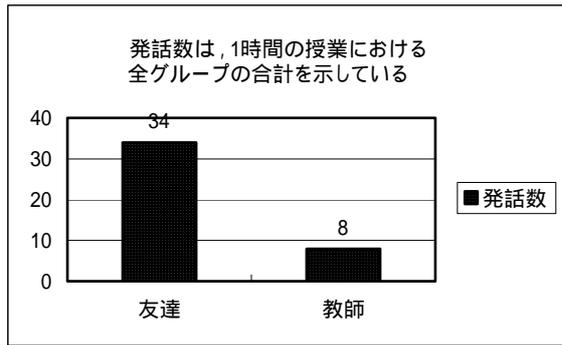
作文に「～が難しい」「～ができるようになりたい」など自分の課題に触れている内容が多いことが明らかになった。

##### (2) 子どもたちの課題への集中

子どもたちは、課題達成を促す発話を多く行っており、課題と無関係な発話はほとんどないことが明らかになった。

##### (3) 子どもたちのつまずきの解消

課題解決の有効な手段として、子ども同士の関わり合いを選んでいることが明らかになった【図1】。



【図1】つまづいたときに聞きに行く相手と発話数

以上のことから、子どもたちは自ら課題を発見し、子どもたち同士で自発的に解決しようとしていることが明らかになった。

## 調査2

### 1. 方法

対象：新潟県内公立中学校1年生

時期：2003年10月3日～11月7日

内容：合唱コンクールに向けて、合唱の練習をする。

分析：ICレコーダーによる会話記録と、VTRによる映像記録から分析した。

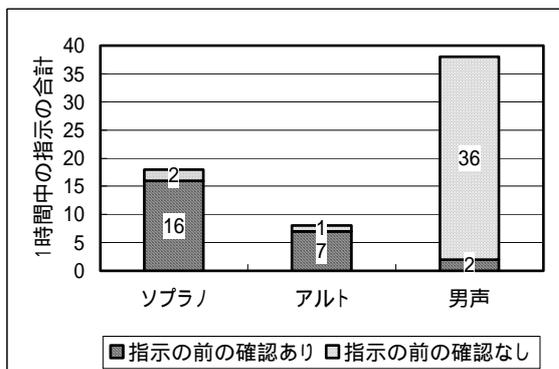
### 2. 観察授業の特徴

教師は1時間ごとに各グループに対して指導を行う。この時間中、他のグループは、教師の指導を受ける機会が全く得られない。

### 3. 結果と考察

#### (1) 指導時の教師の指示と確認の有無

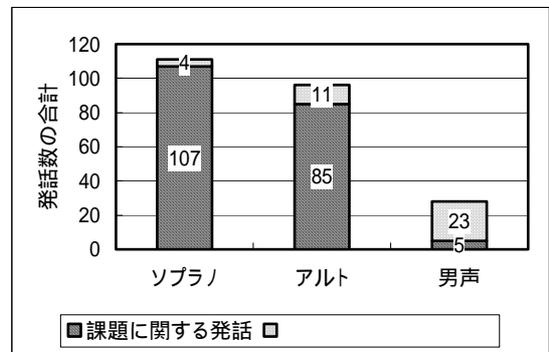
教師の「指示」は男声に対して多く、「指示」の前の「確認」が少ない。一方、ソプラノとアルトは、教師の「指示」が少なく、「指示」の前の「確認」は多いことが明らかになった【図2】。



【図2】教師の指示の数と指示前の確認の割合

#### (2) 自発的な集団とそうでない集団の発生

教師の指導を受けたあとの学習において、課題に関する発話が多いグループと、課題とは無関係な発話が多いグループがあることが明らかになった【図3】。



【図3】グループ練習時の子どもの発話比較

以上のことから、教師の「指示」が少なく、指示の前の「確認」が多いと、子どもたちは積極的に課題解決を行うことが明らかになった。

## 結論

教師が「指示」を控え、子供たち自身に学習方法の選択を任せるようにすれば、子どもたちは自発的に学んでいくことができる。

### 今後の課題

今回の調査では、教師の関わり方の違いによる、子どもの学びの姿の違いを明らかにすることができたが、それは一時的なものであった。

今後は、継続的な学びの姿に注目していく必要がある。

### 【参考文献・引用文献】

- 1) 篠原秀夫：「音楽科教育における指示語に関する研究」(1995、『音楽教育研究 58号』、音楽之友社)
- 2) 森田典子：「生徒の合唱活動における学習行動と集団雰囲気に関する研究」(1993、上越教育大学修士論文)
- 3) 山本弘：「音楽教育を子どものものに - 子どもが音楽するふしづくりへの体質改善 - 」(1973、明治図書出版)
- 4) 水落芳明：「相互作用によるメディアリテラシーの発展に関する研究」(2002、上越教育大学修士論文)